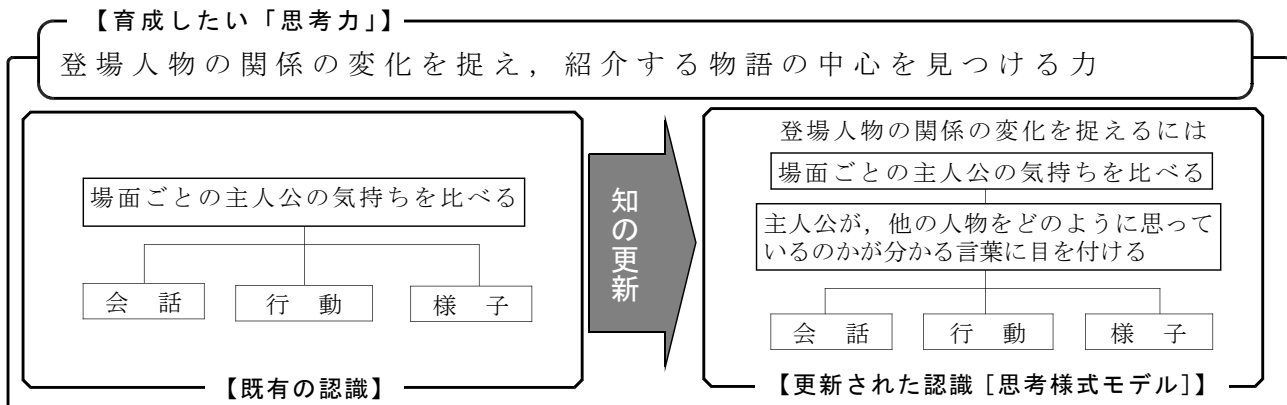


4 言語活動を充実し、思考様式を共有化する学習指導の実際

「お世話になった先生に、お気に入りの物語を紹介しようー『ゆうすげ村の小さな旅館』ー」（第3学年）

（1）本実践の目標構造



登場人物の関係の変化を捉えるには、場面ごとの主人公の気持ちを比べることが有効である。しかし、場面ごとの主人公の気持ちを比べようとしても、うまく比べられない場合がある。なぜなら、場面ごとに想像した主人公の気持ちの全てが、必ずしも登場人物の関係を表したものは限らないからである。それは、気持ちを想像する際の手がかりとなる叙述が、人物・物・状況等、場面によって異なった視点から選ばれることに起因する。

そこで本実践では、根拠とする叙述を、「主人公が他の登場人物をどのように思っているのかがわかる会話や行動、様子に目を付ける」認識へと更新できるように試みた。主人公の気持ちを想像する視点が定まることで、場面ごとの比較を一貫して行うことができ、登場人物の関係の変化が捉えやすくなるのである。そして、登場人物の関係の変化を捉えることで、それが最も大きく変わる場面（物語の中心）を見つけることができるようにしていった。

（2）思考様式の有用性を共有化する言語活動の充実

① 個の「実感・納得」を促す教材開発

想像した主人公の気持ちを再検討する場の設定

教科書教材『ゆうすげ村の小さな旅館（「ウサギのダイコン」）』の中心場面では、女の子の正体がウサギであったことが主人公に判明する。その場面の主人公の気持ちを想像しようとする際、多くの子どもたちの意識が、ウサギの内面よりも外見の変化のみに向きがちになる。そこで、同シリーズの複数の物語を比べて読むことにした。中でも「干し柿」は、主人公がサルの内面的な部分に心を動かす物語である。「干し柿」を読んだ後、再び「ウサギのダイコン」で想像した主人公の気持ちを検討することにしたのである。その際、「主人公が、他の人物をどのように思っているのかが分かる言葉に目を付ける」という思考様式を用いて、想像した気持ちを再検討するようにした（思考のプロセスを自ずと振り返る教材）。このような、自己の記述がよりよいものになるよう加筆修正していく活動を通して、思考様式のよさを「実感・納得」させようと考えた。

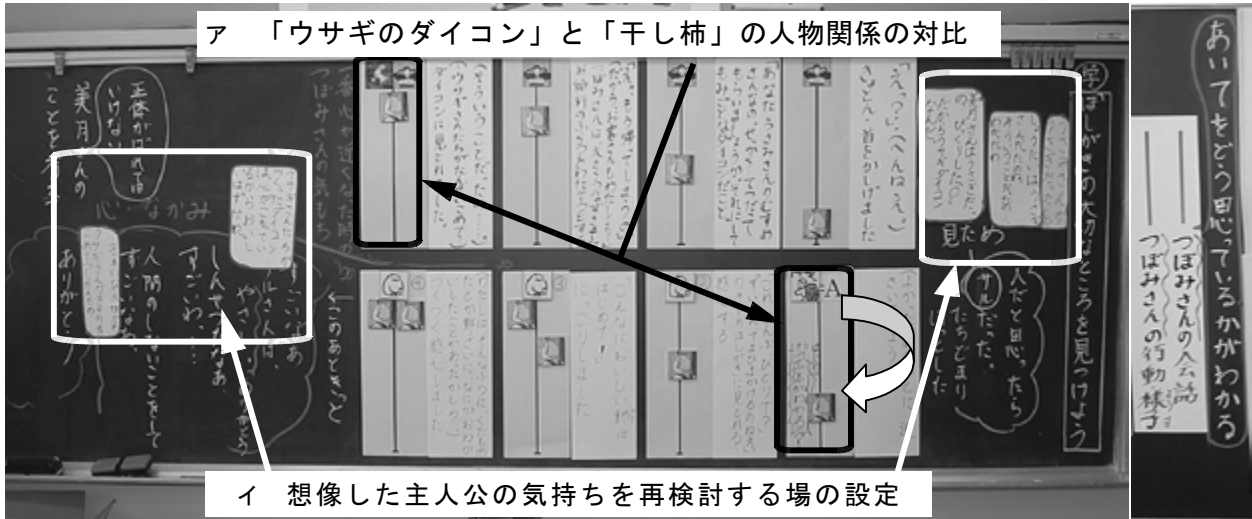
② 集団での「承認・合意」を促す支援

「ウサギのダイコン」と「干し柿」の人物関係の対比

人物関係を、「主人公」と「他の人物」との心の距離として視覚化することにした。そして、「干し柿」の心の距離と「ウサギのダイコン」の心の距離を板書上で対比しながら捉えていく。「ウサギのダイコン」では、正体が判明する場面で心の距離が最も近づく。しかし「干し柿」では、正体が判明する場面であっても、主人公と他の人物との心の距離は、近付いてはいない。そのことに気付かせるために、2つの物語の心の距離を板書上で対比させることにした。その際、主人公が、他の人物をどのように思っているのかが分かる叙述に着目したことで心の距離が捉えられたことを確認し（似た反応を板書上でまとめ、思考様式を位置付ける）、思考様式のよさを「承認・合意」させようと考えた。

(3) 学習指導の実際

① 本時の板書



② 「思考様式を共有化する言語活動」の詳細

ア 「ウサギのダイコン」と「干し柿」の人物関係の対比

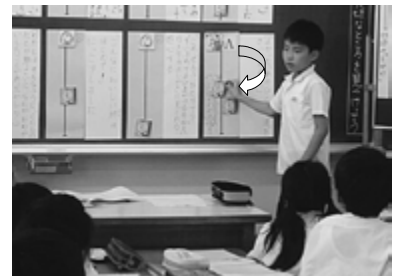
～似た反応を板書上でまとめ、思考様式を位置付ける～

子どもたちはこれまで、「ウサギのダイコン」や「七草」で、女の子の正体が判明する場面で人物の心の距離が最も近くなることを読み取ってきた。前時には、サルを「A」として正体を伏せた「干し柿」を提示した。子どもたちは、これまでの物語から類推し、最後に「A」の正体が分かり、一番つばみさんと心が近くなると予想していた。本時の始め、「A」が最初からサルの姿であったことを明かす。子どもたちは、「わー、サル!」「人だと思ったのに、今度は最初から動物が出てくる。」と自分たちの予想が外れていたことに驚くと共に、以下のような反応を示した。

- C1:「ウサギのダイコン」では、正体分かる場面で心の距離が一番近くなりました。でも「干し柿」では最初に正体分かってしまうということは、出会ったばかりで心が一番近付いていることになってしまいます。
- C2:「つばみさんは思わず立ち止まりました。」と書いてあります。サルと分かって、まだ安心していないから、心の距離が一番近くにはならないと思います。
- T:「思わず立ち止まりました。」から、心の距離が分かるのですか。
- C3:分かります。それは、相手のことをどう思っているのかが分かる言葉だからです。もし、心の距離が近づいていけば、思わず立ち止まったりはしないと思います。

このように、「干し柿」においては、正体が判明する場面の心の距離を捉え直していく必要が生じた。その際、C3の発言を基に、「主人公が、他の人物をどのように思っているのかがわかる言葉に目を付ける」という思考様式を用いれば、違う展開の物語でも心の距離を捉えられることに気付いていた。そしてその後、この場面における心の距離を発表し合った。

- C4:サルだと分かって思わず立ち止まったけれど、その後に、「その声の感じがまるで人間みたいでほっとした」とも書いてあるのでここくらいです(主人公のカードを一番離れたところではなく、少し近づけて貼る)。
- C5:安心したという意味だから、僕はもうちょっとそこで上がったと思います(前の子よりも少し上の位置にカードを貼る)。



【主人公のカードを移動する】

それぞれの子どもが捉えた主人公とサルとの心の距離は少しずつ異なっていたが、「ウサギのダイコン」とは違って、「正体分かったとしても、最も心が近付いてはいない」と、似た反応としてまとめ、思考様式を位置付けた。

そしてこの後、子どもたちは、他の場面の心の距離を個々に捉えていき、自分の考えをグループや全体で交流し合った。

イ 想像した主人公の気持ちを再検討する場の設定

～思考のプロセスを自ずと振り返る教材～

心の距離図の交流を通して、主人公とサルの心が最も近付いた場面を確認した後、その場面の気持ちを吹き出しに書かせた。そして、主人公が他の人物をどのように思っているのかが分かる叙述を根拠に主人公の気持ちを想像し、以下のように発表した。

C6:すごいわね。サルさんは柿にも心があると考えて、柿においしくなるようお願いするなんて感心したわ。

C7:このサルさんは、人間のしないことをしてすごいなあ。やさしいな。

そしてこれらが、単なる外見についてどう思っているのかではなく、「他の人物の心や中身」について想像していることに、冒頭場面と比べることによって気付いていった。

そこで、以前に書いていた「ウサギのダイコン」における主人公の気持ちの吹き出し数枚を提示し、主人公の気持ちを再検討する場を設定した。以前は「そういうことだったの。」という外見的な見方に関する叙述のみに着目して想像していたことを振り返り、「ダイコンに見とれました。」等その他の「主人公が、他の人物をどのように思っているのかがわかる言葉」に目を付け、主人公の気持ちを加筆していった。



【以前の吹き出しを振り返る】

C8:「美月さんは、ウサギだったの。びっくりした！ウサギだからウサギダイコンって言うんだ。」
↓(に加えて)

C8:「美月さんたちが、こんなに心をこめて作ってくれていたんだね。本当にありがとう。」

「干し柿」を読む以前は、「ウサギのダイコン」については、多くの子どもが、外見的なことに関する主人公の気持ちしか記述できていなかった。しかし、「干し柿」を読んだ後は、ほとんどの子どもが、内面的な要素にまで関わって記述し、心の距離が近付いていることを表すことができた。

このように、自己の表現をよりよくしていく体験を通して、思考様式のよさを「実感・納得」できるようにつなげていった。

③ 検証データを通して ～量的な見取りから～

「思考力」テスト（10点満点）の結果は、実践前から実践後にかけて、平均点で1.54点向上した。この差についてt検定を行ったところ、有意差が見られた〔 $t(38)=4.38, P<.01$ 〕。一方、実践直後と1か月後のテストの結果を比較したところ、平均点は1.42点減少した。この差についてt検定を行ったところ、有意差が見られた〔 $t(25)=5.71, P<.01$ 〕。これらのことから、本実践を通し「思考力」の向上は図られたものの、その定着は十分ではなかったと言える。

また、思考様式の広がりに関しては、本実践の前後で比較して、3名から17名に増加した。

④ 考察

同じ主人公を軸に複数の物語を比較することで、思考様式を共有化しやすくなった。それにより、実践後の「思考力」テストの平均点が伸びたと考える。特に、本実践に直結した設問「想像した気持ちの根拠となる叙述の取り出し」（2点）で、実践前（0.7点）から実践後（1.3点）に最も大きな伸びが見られた。

一方で、思考様式の広がりには、半数程度に留まった。その要因の一つが、抽出児の見取り記録から伺えた。高①②児は、心の距離図を作成し始める前に思考様式を言い、作成した心の距離図を根拠となる叙述を用いて説明できたのに対し、低①②児は、それらができていなかった。見通しの場面で思考様式を用いるよさを全体で確認したものの、低①②児は、心の距離図を直感的に作成してしまい、思考様式の習得・活用が図られていなかったのである。このことから、低位群においては、思考様式の「承認・合意」が十分になされていなかったことが考えられる。リフレクションにおいては、そのような様相に対し、叙述に線を引く等、自力解決の際に思考様式を用いやすくする支援の必要性が示された。